

## みつい 三ツ井遺跡

**調査の経過** 三ツ井遺跡の所在する一宮市丹陽町三ツ井地区は、同市の東南部に位置しており五条川と青木川の合流地域にあつている。この地区は、数多くの埋蔵文化財包蔵地として従来から知られる。しかし、日本道路公団が名神高速道路上りパーキングエリアの建設を予定している地域は未だ開発の手が及ばず中世期以降の島畑景観を良好に留めている事で知られていた。こうした状況下で愛知県教育委員会は遺跡の有無と遺跡範囲の確認調査を平成6年・7年にかけて実施した。その結果、パーキングエリア建設予定地内には古代から中世にかけて遺構・遺物を伴う遺跡であることが明らかとなった。遺跡としての範囲は、予定地の3分の1にあたる約12,000㎡程で、平成8年度は4,000㎡の調査面積計画でスタートしたが、後に調査面積の契約変更があつて2,123㎡増の計6,123㎡を実施した。

今年度の調査地は先行事業である側道部にあたり、幅12mの狭長な調査区を東からA区～D区の4分割で行い、面積の増加分についてはA区の南側にE区として設定した。調査の結果、現行水田下1mの標高6.3mに堆積する黒色有機質粘質シルト層中より上位で遠賀川系土器を下位より縄文晩期の土器を検出した。さらに同土層中から稲のプラントオパールをも確認し、県下における稲作受容期の様相に問題提起することとなった。



第1図 調査区位置図 (1:6250)

**三ツ井遺跡** 三ツ井遺跡の所在する一宮市丹陽町三ツ井地区は、五条川と同河川の支流である青木川の立地環境に挟まれた地域であり、両河川の形成した自然堤防帯と後背湿地に位置する。三ツ井遺跡は、標高が高位である畑地で約7.8m、低地である水田で7.3m、これらが複雑に入り組んで鳥畑といわれる独自の景観を呈している縄文時代から中世にまたがる複合遺跡である。

この地域には周知の遺跡が多く、三ツ井地区には縄文晩期の土器出土の池之上遺跡、方墳と推定されている稲荷山古墳、その他刻書「下乃」灰釉陶器出土の茂八杖遺跡、六所遺跡、飛所遺跡、五輪ヶ淵遺跡など存在する。また隣接する伝法寺地区には、弥生時代から古墳時代にかけての標識遺跡で著名な元屋敷遺跡、奈良時代の伝法寺廃寺、西大門遺跡など存在する。さらに西北約2.5kmには縄文時代晩期屈指の集落遺跡である馬見塚遺跡、東北約2kmには古墳時代初頭の平松遺跡が所在する。

**三ツ井遺跡の概要** 三ツ井地区はこの地域では良好に鳥畑景観を残していることで知られており、調査開始当初は鳥畑に伴う中世、またその下層に存在する古代の遺構の調査を主眼に実施した。そこで、鳥畑形成過程基礎資料を得るためにパーキングエリア内の全ての鳥畑にトレンチを設定した。遺跡の基本層序は現状畑地の場合、第1層として耕作土、2層：褐色シルト（中世整地層？）または、黒褐色粘質シルト（古代包含層）、3層：黄褐色砂質シルト、4層：暗灰黄シルト、5層：灰褐色粘質シルト、6層：黒色有機質粘質シルト、7層：にぶい黄シルトまたは灰オリーブ細粒砂である。検出された遺構・遺物は、縄文晩期～弥生前期（A期）、A期～古墳時代初頭（B期）、古墳時代～平安時代（C期）、中世（D期）の4時期に大きく区分できる。また、遺構検出はC・D期は3層上位で、B期は4層上位、A期は7層上位でおこなった。

調査の進行に伴い、第6層黒色有機質粘質シルトの層位比高差が顕著な地点を確認でき、特に、A区西部からB区東部にかけて幅約70m、比高差約1.5mの谷状地形の存在を確認した。この地形境部分西側から縄文後・晩期の土器等が出土、微高地部から遠賀川系土器・削痕系土器等が出土している。



鳥畑景観（調査区遠景北から）

**A期の遺構・遺物** A期の遺構は、基盤層にあたる第7層上位で確認できた。その結果、Ba・Bc区に存在する落ち込みへの傾斜地に不定形の溝状遺構が検出され、縄文時代後晩期の土器などが出土した。また、C～D区に存在する微高地からは遠賀川系土器・削痕土器などが出土し、おもに弥生時代前期の遺構が検出された。

Ba・Bc区の溝状遺構は、おもな埋土がシルト質細粒砂で微高地から落ち込みへの溝のように検出され、深さは10～25cm、形状は一定していない。おもな出土遺物は、縄文時代後期後葉と考えられる深鉢（8）、同晩期前葉（大洞BC式）と考えられる無文精製壺（4）、深鉢、石錘2点（1・2）、石製装身具1点（3）などである。無文精製壺はこの地方に類似が極めて少なく他の出土遺物から考えて寺津式に該当するものと考えている。

この他特筆する点としてBa区の黒色有機質粘質シルト層から数多くのイネのプラントオパールが検出され、また深鉢に看取できる籾圧痕がイネの可能性もあり、この地域における稲作受容時期が稲作形態も含めて今後の課題となろう。その他の遺構としてBb区のSK54、68、70、77、85、86があげられる。これらは円形または楕円形の小土坑で、径は上位で1m下位で50～60cm、深さ60～80cmと規模・埋土ともほぼ同様なものである。出土遺物が無いため時期・性格等不明であるが、弥生時代前期の土器を含む層の下位で埋没している。

D区のSK19は、遺構下層部に堆積する黒色土から数多くのイネのプラントオパールが検出されている。遺構全容は不明であるが土壌分析結果から近くでイネの栽培がおこなわれていたことを示すものである。時期は埋土から推定すると弥生時代前期と考えられる。

島畑Tiの下層では弥生時代前期の良好な遺構・遺物に恵まれ、溝2条、井戸と思われる土坑1基、住居と思われるもの2棟、他小土坑数基が検出された。特にSK01からは遠賀川系土器（壺・蓋・鉢等）が一括して出土、時期は貝殻山（新）に比定できよう。一宮市ではこれまでに遠賀川系土器は、馬見塚・弥勒・元屋敷・北川田・二夕子・河田・山中・八王子遺跡から出土している。三ツ井遺跡は9例目にあたり、この地における縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての様相を理解する際の新たな資料を提供することとなった。

**B期の遺構・遺物** B期の遺構は、第4層上位で確認できた。その結果、B区～C区につながる大溝1条と大溝に合流・枝分かれする同時期の溝数条がほぼ調査区全域の地形境界部等で検出された。

大溝（B区SD17）は幅2.5～3m深さ1m、他の枝溝は幅1m前後深さ50mで、これらはB区からC区を経て一部はD区へと続いているものと考えられる。遺構の時期出土遺物が皆無のため層序から推察すると、第3層上位で検出される最古の遺構が古墳時代前期（廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式）であることから、埋没時期はそれ以前ということになろう。また、掘削時期については調査区内外の採集土器片に弥生時代後期のものが存在することからこれを掘削時期と現段階では考えている。

**C期の遺構** C期の遺構は、第3層上位で確認できた。C期の遺構は、現況水田の場合包含層はもちろんのこと遺構自体もほとんど削平されているため、現況畑地でもにも検出をおこなった。

ただD期の記述で触れるが、島畑が形成される段階において、当時の地形を大幅に造成しているため現況畑地であっても古代包含層と考えている第2層（黒褐色粘質シルト層）が残存していたのは、A区島畑1東部とB a区島畑6東部とB b区島畑7であった。

A区で検出された遺構は、断面がU字または逆台形を呈し幅80～100cm深さ50～60cm規模の溝6条がほぼ等間隔で東北から西南方向の軸線で調査区全域に検出された。また、この溝群の南側では北辺に竈のある1辺4m程の竪穴建物を検出した。遺物はおもにS B01、S D09、10から出土しており、須恵器の杯・杯蓋・盤・椀・把手付鉢小型横瓶、土師甕、灰釉陶器の椀がある。時期は猿投窯編年によると小型横瓶がK-7、灰釉陶器の椀がK-90、他は全てO-10と考えられ、8世紀後半から9世紀後半に比定できる。

B a区で検出された遺構は、断面がU字又は逆台形で幅100～120cm深さ30～80cm規模の溝5条が東西方向の軸線で検出された。遺構からの出土遺物は極めて少ないが、S D28からほぼ一個体須恵器の鉄鉢が出土しており、時期はO-10と考えられ、8世紀後半に比定できる。これはA区出土の把手付鉢同様猿投窯の特徴である表面黄土塗布の状況が明瞭にみられる。また2点とも一個体ほぼ完形であり新たな器種資料を得られることができた。その他、畿内産土師器の杯が1点出土しており、内面の暗文がみうけられないことから8世紀後半代のもと考えられる。その他S K14からはS字甕と柳ヶ坪型壺が共伴し、埋土は古代の遺構とほぼ同じ黒褐色粘質シルトである。これにより第3層の上位で検出される遺構の時期は古墳時代前期まで遡ることが確認された。古墳時代前期のその他の遺構としては島畑T i下層で井戸と思われる土坑3基と小規模な溝を確認できた。

これらの成果から三ツ井遺跡の古代は8世紀後半代が中心となり、検出遺構の軸線は東北から南西方位にあることから、この地域における本格的な条里の施行は中世に入ってからと推定する。ただし、A区とB区で検出した溝群の切り合い関係が未確認の段階であるので、A区の溝群（古）・B区の溝群（新）と確認されれば条里の施行時期は遡る可能性はある。



A区完掘状況（南から）



B a区完掘状況（南から）

D期の遺構 D期の遺構は、C期同様第3層上位で確認できた。遺構は島畑に関わると思われる溝・

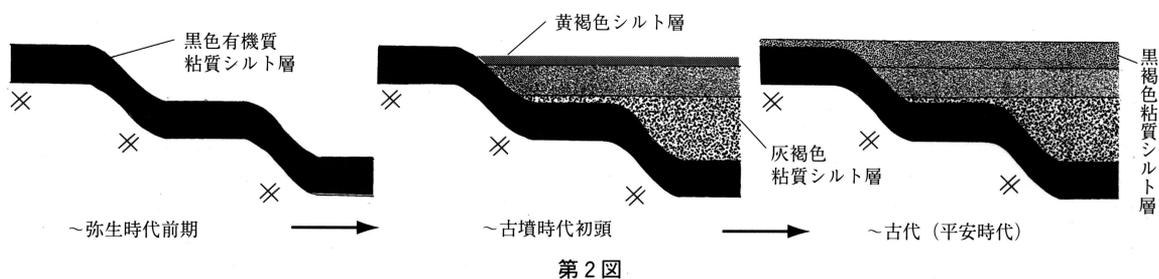
・遺物 土坑がおもに現況島畑から検出され、埋土はほぼ第2層と同じ褐色シルトである。遺物は細片でごく少数なため遺構時期の決め手を欠くが、現段階ではA区SK41出土の灰釉系陶器の小皿（北部系）が唯一の出土遺物で大洞東または大畑大洞と考えられ14世紀後半に比定できる。

そこで、ここでは島畑形成過程について金田章裕氏の研究にもとづきながら三ツ井遺跡の島畑について若干の検証を試みる。

三ツ井地区周辺の島畑を実査している金田氏の「条里地割内部における島畑景観の形成」（『条里と村落の歴史地理学研究』1985年）によると、島畑形成の微地形条件について以下の4点の事実が確認されている。

- ①自然堤防とその後背湿地の基本的配置は弥生時代頃にはほぼ現状に近いものとなっている。
- ②それ以後においても自然堤防は辺縁部へ部分的に拡大している。
- ③洪水堆積物と島畑はデリケートに対応している。土層から厳密な島畑の造成時期は知ることはできない。
- ④島畑はいずれも表土下の第1あるいは第2の層の堆積以後に造成されたものであり、一般的には水田面下30～40cmぐらいで、最も深い例でも50cmぐらいで、互いに隣接する水田と島畑の土質は同一のものとなる。

第5図にあるように調査区内に存在する島畑へそれぞれ島畑1～島畑8と開発エリア内の島畑をそれぞれ島畑T a～T iとし、ほぼ全島畑に1ヶ所以上の断面を調査した。その結果、①②については周辺の他の遺跡とほぼ同様の状況がみられる。また、現況から約1m下層に存在する黒色有機質粘質シルト層上位堆積時期は三ツ井遺跡においては弥生時代前期であることが確認できた。さらに、その後の堆積状況を模式化すると以下の様になる。



つまり極端な例ではあるが、三ツ井遺跡では弥生時代前期の段階に形成された旧地形はその後の堆積状況により古代（平安時代）には地表面からは判別の難しい景観となっていたと考えられる。次に④について、三ツ井遺跡内島畑はこの状況にあてはまり、第2層黒褐色粘質シルト（古代包含層）を削平して開発行為がおこなわれている。

また金田氏は島畑造成のタイプには次の3様があるとしている。

A水がかりのよくない自然堤防の中核部分で、むしろ水田の「地下」を主目的とするような形で島畑が形成されている場合。

B 自然堤防の縁辺から後背湿地部での島畑形成であり、もともと水田として利用していたが、そのうちのやや水がかりの悪い部分、すなわち「低湿水損場であると同時に旱損場である」というような場所であるいは従来の良田の部分が氾濫を被ってそのような条件になった場合に、水田の一部に土を掻き揚げて島畑を造成することによって畠と水田とに分離し、両者共有効に利用できるようにしたケース。

C 「島畑は条里制の施行、水田化作業の進行する中で、それ以前に形成された自然堤防があたかも島のように水田中にとり残され、そこが畠地となったもの」（『師勝町史』 弥永貞三氏）にあるように、現在なお島畑として確認できるものにはこのタイプが多い。

最後に、この分類を踏まえて調査した島畑について三ツ井遺跡独自の分類を試みる。

微高地利用タイプ（畠→）		開発に伴い上層削平タイプ				
旧地形	古代包含層	畠→		畠→水田→畠	水田→畠	
島畑 4	島畑 1 東 島畑 6 東	島畑 1 西	島畑 7	島畑 Tb	島畑 2	島畑 Tf
		島畑 3	島畑 8	島畑 Tc	島畑 Td	島畑 Th
		島畑 5		島畑 Tg	島畑 Te	島畑 Tj
		島畑 6 西				

※島畑Taは調査不可能、島畑9・10・11は来年度調査予定のため掲載していない。

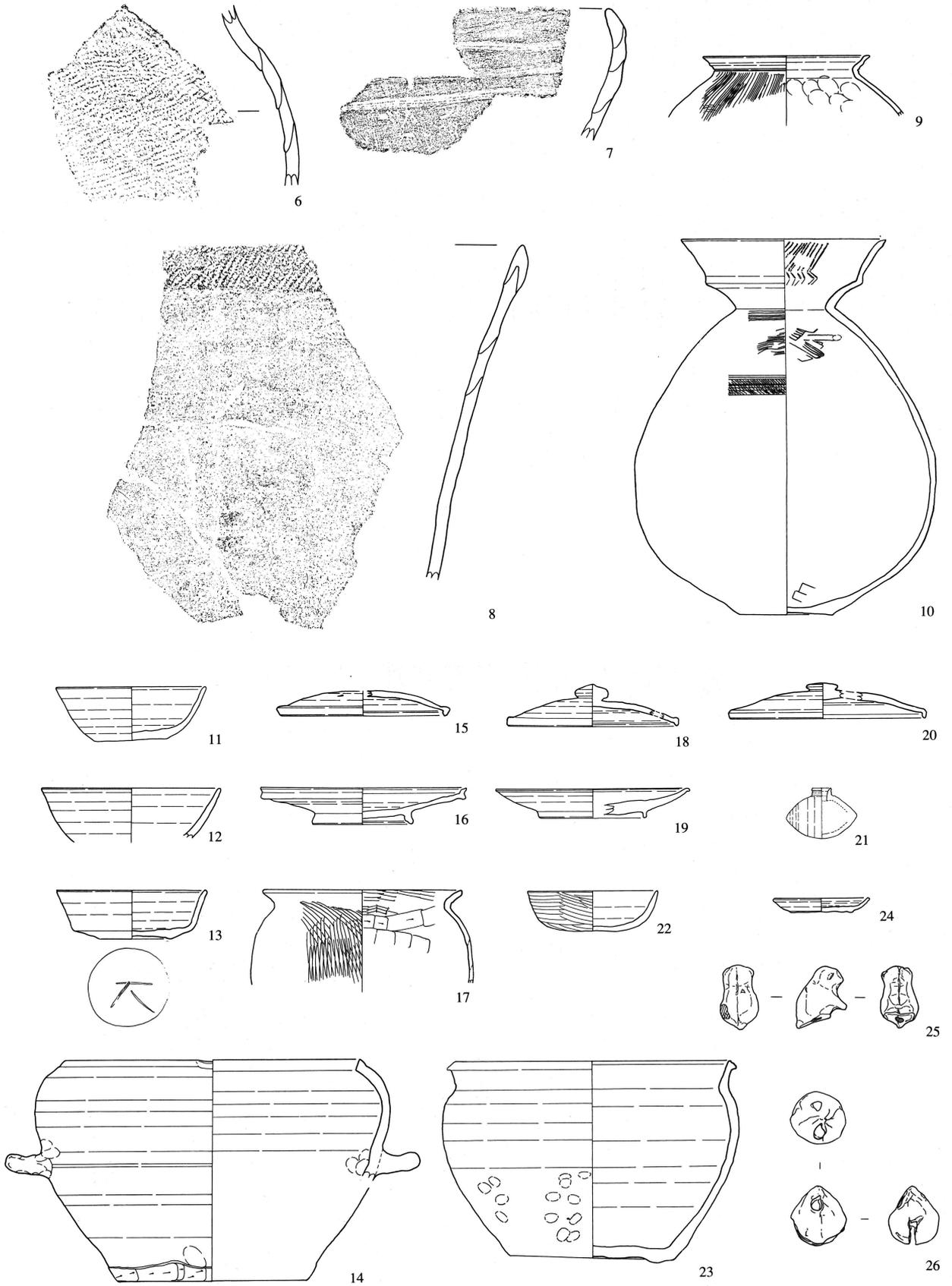
今回の調査により、開発に伴い上層削平タイプの島畑は幾度かの拡大・縮小等を繰り返して現在に至るものと確認でき、タイプBに該当する。また、微高地利用タイプはタイプCに該当する。

（小川芳範）



1~3、5 (S=1/2.5、4 (S=1/5)

第3図 出土遺物

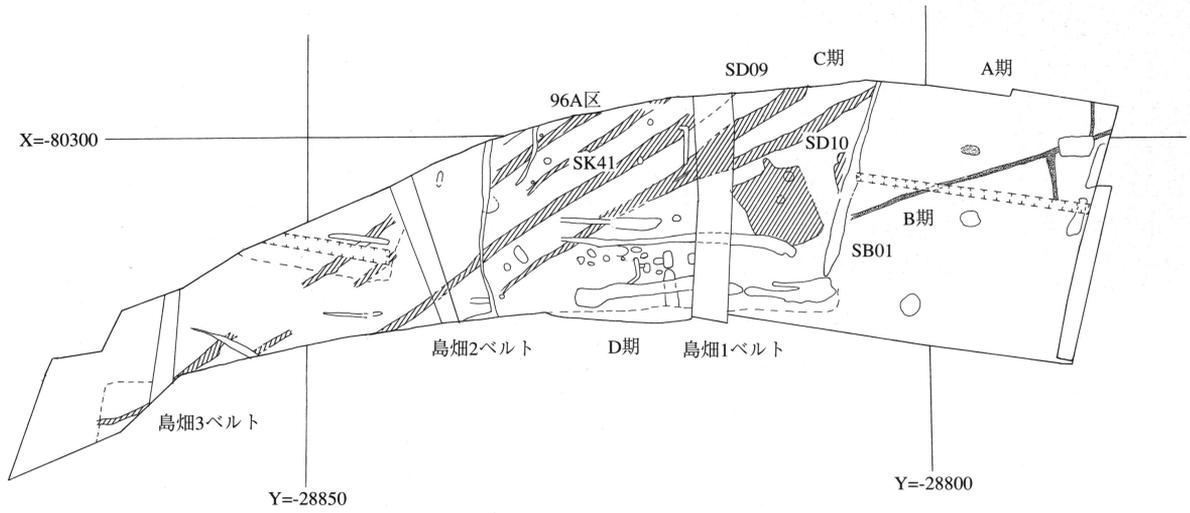


9~24 (S=1/5) , 6~8, 24・25 (S=1/2.5)

第4図 出土遺物



第5図 鳥畑位置図 (1:2500)



第6図 A区上面主要遺構図 (1:625)



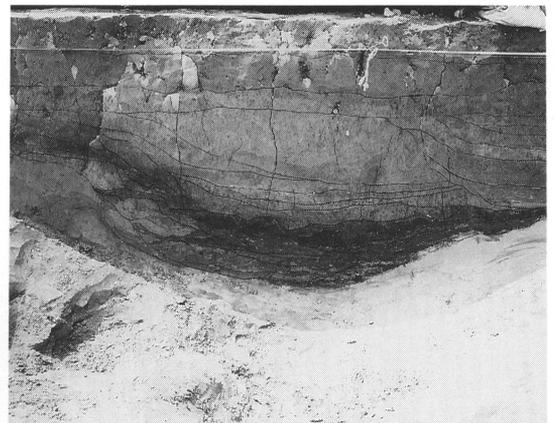
島畑T i 南壁セクション



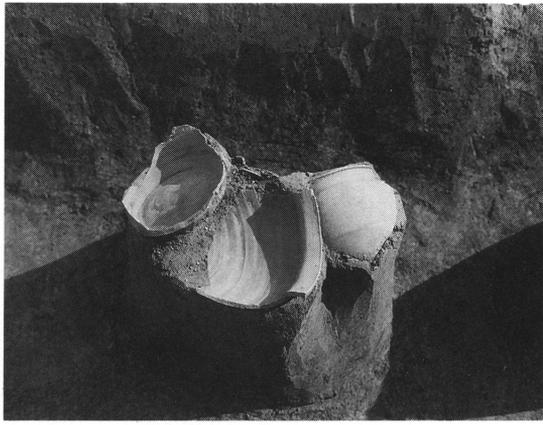
島畑8 北壁セクション



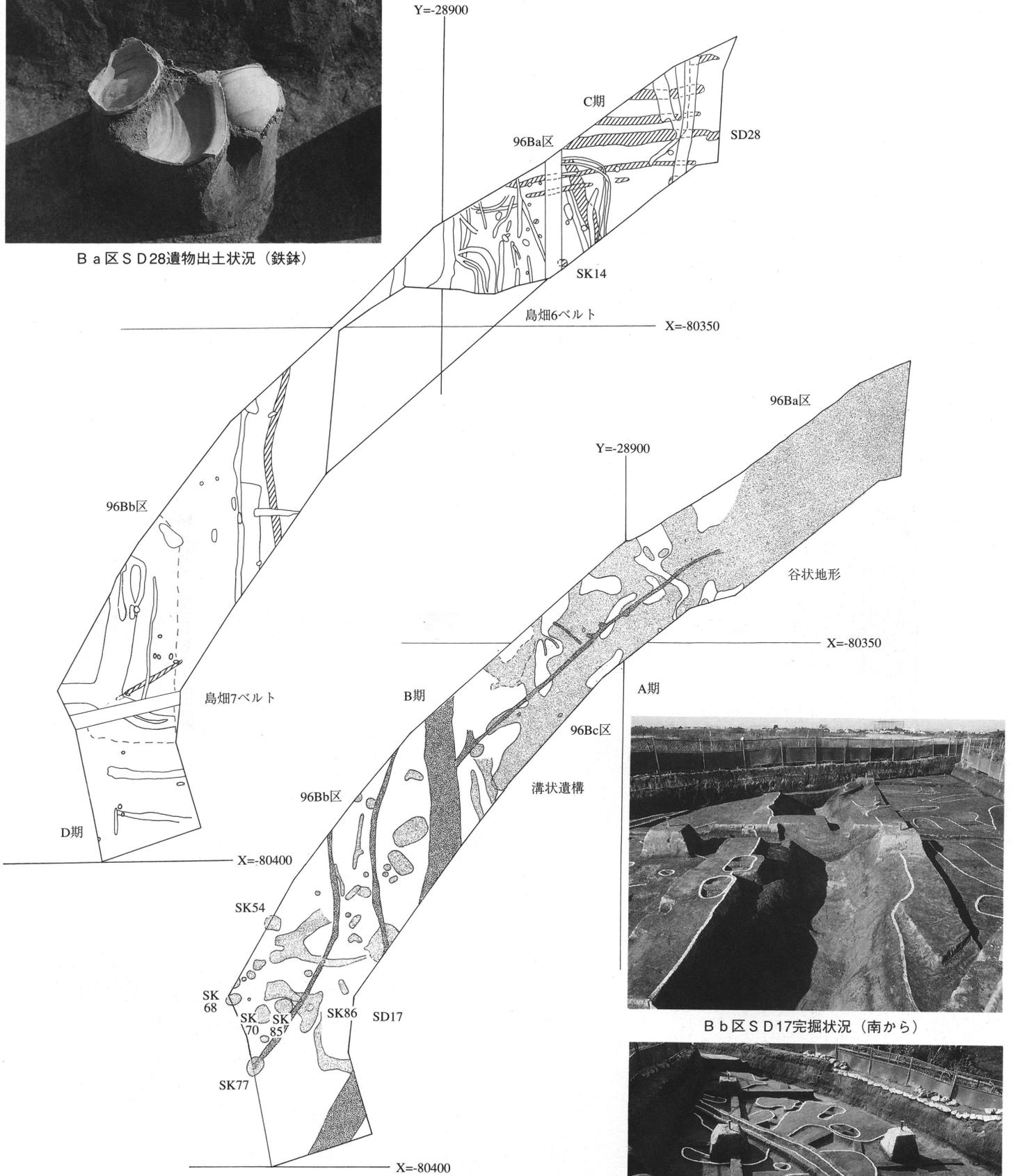
島畑T i 下層S K 01遺物出土状況 (東から)



D区S K 19西壁セクション



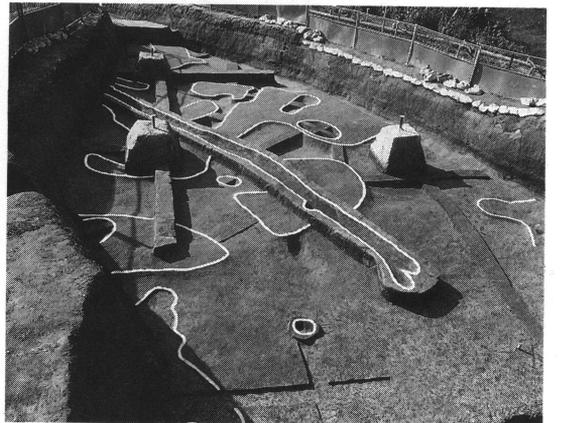
B a区SD28遺物出土状況(鉄鉢)



第7図 B区上・下面主要遺構図(1:500)



B b区SD17完掘状況(南から)



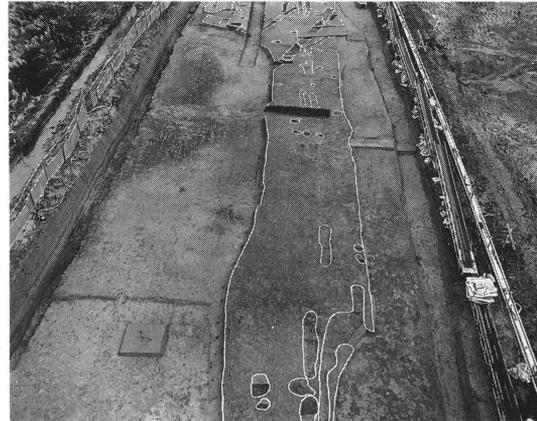
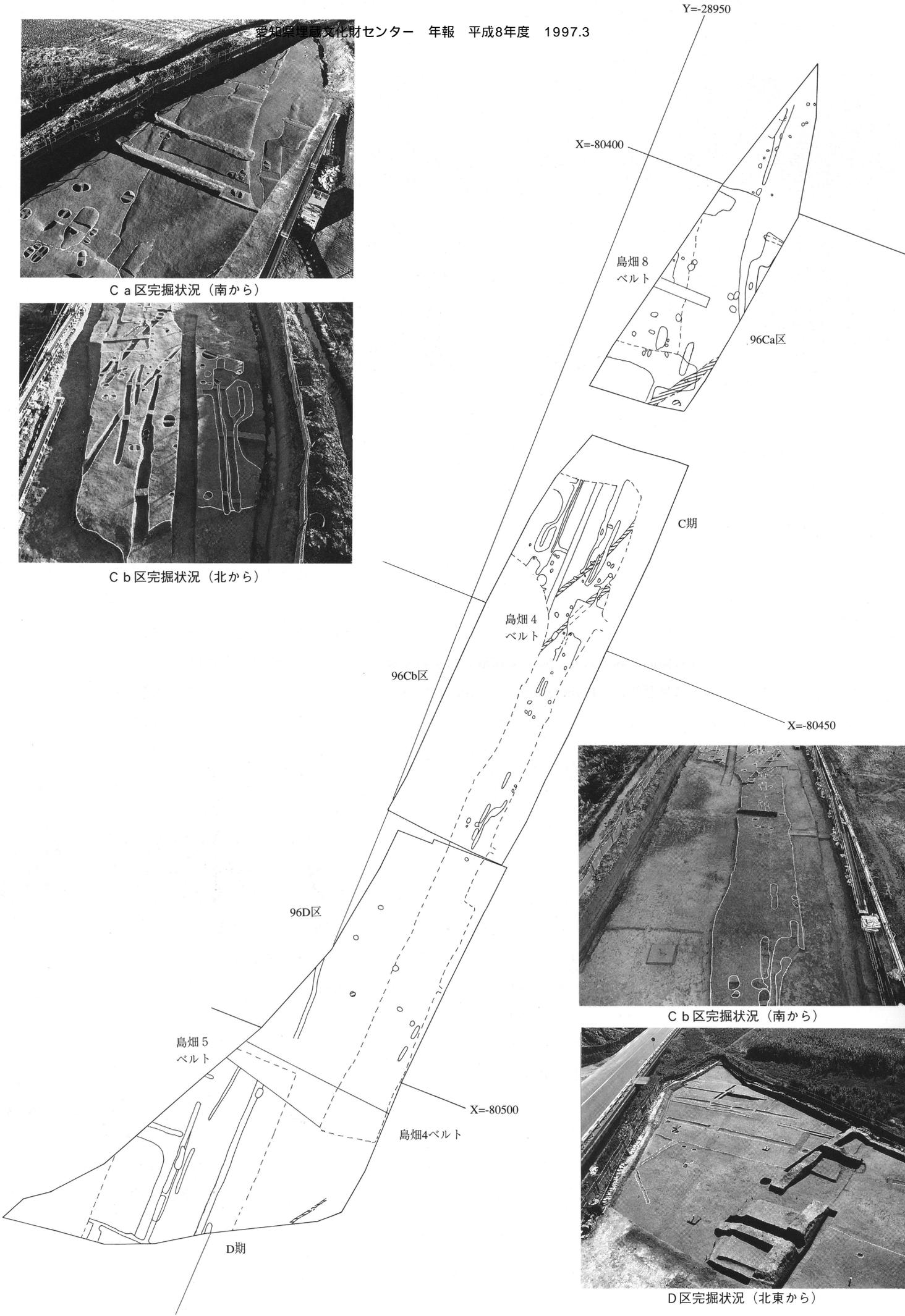
B a区溝状遺構(東から)



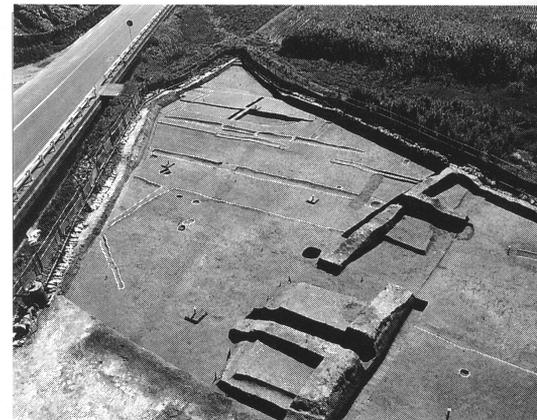
C a 区完掘状況 (南から)



C b 区完掘状況 (北から)



C b 区完掘状況 (南から)



D 区完掘状況 (北東から)

第 8 図 C・D 区上面主要遺構図 (1:500)

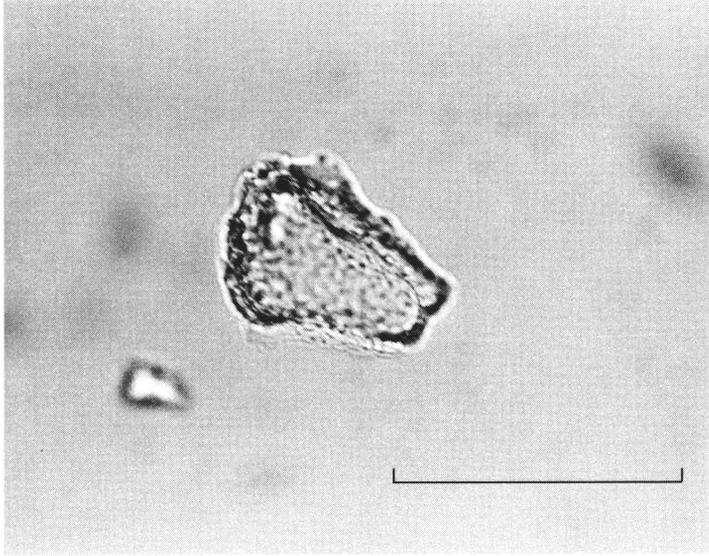
**自然科学** 三ツ井遺跡において植物珪酸体（プラント・オパール）の定性分析をおこなった。試料はA区、D区、Ba区およびBb区の溝、土坑およびトレンチより水平的または垂直的に採取したものである。植物珪酸体の抽出と分析方法は次の手順で行った。試料の分散と沈底法による微粒子（20  $\mu\text{m}$ ）の除去後、残渣を乾燥させた。その残渣を封入剤（オイキット）中に分散させ、プレパラートを作成し検鏡をおこなった。同定はイネ科植物の機動細胞珪酸体に由来するものを主な対象として、400倍の光学顕微鏡下でおこなった。植物珪酸体はイネ属・ヨシ属・ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属などが含まれる）・棒状珪酸体・不明種・その他（植物珪酸体とともに検鏡される珪藻など）のものに大きく分類し、検鏡の効率化をはかった。分析した試料は合計151点におよぶが、このうち主要な遺構の分析結果を以下に報告する。

**分析結果** A区では、弥生時代前期の遺物がみつかった黒褐色粘土層から、ヨシ属の植物珪酸体とともにイネ属の植物珪酸体が確認される。

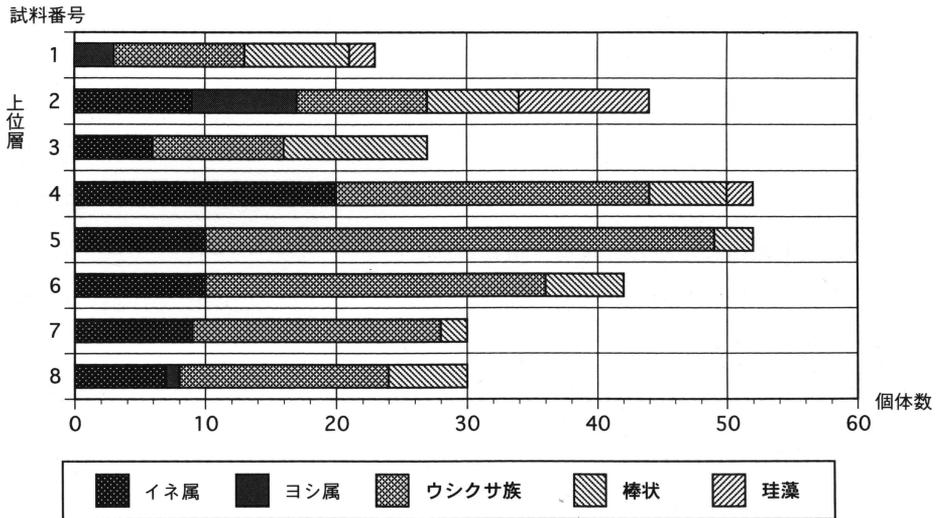
Ba区のトレンチにあらわれる層序断面では、縄文時代晩期と推定される層厚およそ10cmの黒褐色シルト質粘土層（標準土色、10YR2/2の色調を示す）が、側方へ連続性よく確認することができる。本層は調査区西方から東方に向かい徐々に標高を下げる（標高差およそ0.8m）。この粘土層からもイネの植物珪酸体が確認された。また、西方から東方へ標高が低くなるにしたがって、検鏡されるイネの植物珪酸体密度が西方で高く、東方で低くなる傾向がみられる。東方で採取した試料では、イネの植物珪酸体の数が減少していくのとは対照的に、*Pinnularia*属、*Cymbella*属といった湿地性・流水性の珪藻殻の増加がみられた。このことから、黒色粘土層の堆積時には調査区東方において流水的な湿地環境が広がっていたものと推定される。

Bb区では、弥生時代前期の土器を含む層の下位よりみつかると土坑群の試料について分析をおこなった。試料全体を通してウシクサ族（ススキ属などを含む）の植物珪酸体が多くみられる（第9図）。例えば、土坑群のひとつであるSK86の分析結果では、イネ属の植物珪酸体も若干確認されているものの、イネ属の量に比べてその数10倍の量のウシクサ族の植物珪酸体が見つかった（第10図）。A区・Ba区・D区・の試料と比較して、Bb区ではおのおの試料中の植物珪酸体含有量が非常に多く、かつ検鏡される植物珪酸体のほとんどをウシクサ族が占める。このような大量の、ススキ属などを含んだウシクサ族の植物珪酸体が見つかる事実は、Bb区がほかの調査区に比べると乾陸地であり地形的に高い場所であったことを示唆する。

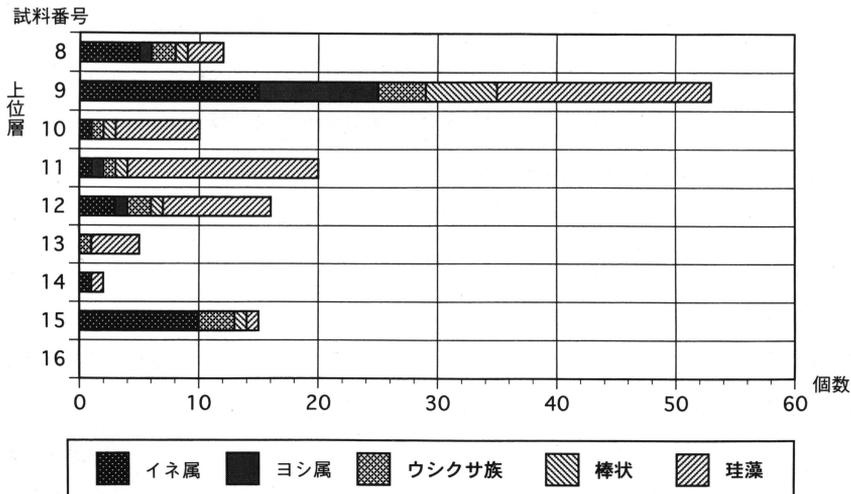
D区の弥生時代前期と推定される土坑、SK19からヨシ属の植物珪酸体とともに、イネ属の植物珪酸体を確認される。とくに、層厚およそ10cmの黒色粘土からなる9層（試料番号9）では、同じSK19の他の試料に比べてイネ属の植物珪酸体が多くみられる（第11図）。また、全ての試料から植物珪酸体とともに珪藻殻も検鏡され、*Pinnularia*属、*Cymbella*属といった湿地性・流水性の珪藻が多くみられた。このことから、土坑の埋積過程において本調査域は沼沢地的な環境であったことが示唆される。（鬼頭 剛）



第9図  
B b区で見つかるウシクサ族植物珪酸体の  
顕微鏡写真  
スケールは100 $\mu$ m



第10図 B b区、土坑 (S K 86) の植物珪酸体定性分析結果



第11図 D区、土坑 (S K 19) の植物珪酸体定性分析結果

まとめ 三ツ井遺跡の発掘調査は本年度より2ヶ年計画で進めているが、本年度までの調査で明らかになったことについて年代順にまとめると、以下の通りとなる。

- ①三ツ井遺跡は、縄文時代後期後葉より多少の断続はあるものの中世にまたがる複合遺跡である。
- ②三ツ井遺跡の初現は、縄文時代後期後葉段階まで遡る。この様相は尾張平野における縄文中期以降の海退現象に伴う住居域拡大による結果であろうが、本遺跡の北3kmに位置する縄文中期の遺跡である佐野遺跡との関連を考慮する必要性が生じた。この時期では明確な遺構を伴っておらず遺物としても散在的である。
- ③縄文時代晩期前半になると、若干の遺構の検出と共に遺物量は増加する。粗製深鉢を主体としながらも、大洞BCに比定できる小型精製壺の出土は注目される。更に、この時期の土層中に量的に多い稲のプラントオパールを検出した事や稲の籾殻圧痕の可能性のある土器片が出土している事は、付近での小規模かつ初現的な稲作を考慮する必要がある。
- ④縄文時代晩期後半のいわゆる突帯文期は、三ツ井遺跡において空白期となる。ウシクサ等のプラントオパールの検出は、高燥化を裏付けており一時的な住居域の移動を示唆している。
- ⑤弥生時代前期段階に至ると、遺構・遺物は調査区全般に広く見られるようになる。状況は、五条川中流域に共通する在地的弥生時代前期遠賀川系壺（削り出し突帯が主体）に、削痕系深鉢が組成する。
- ⑥弥生時代中期～後期は、低調で遺構・遺物ともに明確な面を確認できないが、古墳時代になると南北方向にB区・C区を縦断する溝や、C区の東側では井戸や溝も検出でき、居住域としての土地利用が活発化する。
- ⑦古代（8世紀後半）の遺構は主には現況島畑上で確認している。A区からB区にかけて比較的大規模な北東から南西方向の溝6条が確認された。溝付近から住居跡と想定できる遺構を検出したが、この時期の居住域の中心はより北方にあるのであろう。
- ⑧視覚的な景観としての島畑の形成は中世後半と言われていたが、これを裏付ける事ができた。これらに伴う遺構群はいずれも東西・南北方向を維持しており、中世条里規制の過程で形成された事を窺わせる。今日に残る島畑は中世の島畑の延長線上にあるが、同一の島畑でも縮小・拡大といった改変を幾度となく受けており当時の社会変化の影響であろう。
- ⑨三ツ井地区は二つの河川形成による微高地と湿地帯が複雑に展開しているが、大きな地形環境としてA区西側からB区東側にかけて南北に走る谷地形が認められた。谷地形に沿うように微高地が南北方向に展開するが、古墳時代の早い段階には平坦化が進行し新たな地形環境での土地利用への段階に入る。

（高橋信明）